

美術の窓 (146)

平田一式飾り探訪

大和文華館館長 浅野秀剛

美術展業にも流行というものがあ
る。近年の流行といえば、だまし絵、怖
い絵、刀剣などなど。ただ、刀剣の専門
家から見れば、刀剣の魅力に目覚めた人
が増えただけで、流行という言葉で片
づけられるのは不本意と思っているか
もしれない。しかし、ネットゲームから
入った若い女性の熱狂ぶりを見ると、
それがそのまま刀剣愛好者の拡充に繋
がるのか疑問を覚えずにはられない。

刀剣ほどの熱狂はないが、江戸ブ
ームというのは続いている。その関連
でか、見世物も静かなブームといえる
かもしれない。2年前に国立民族学博
物館で開催された「見世物大博覧会」
も5万人近い入館者数を記録し、図
録も増刷となった。白状すると、私はそ
の展覧会を見ていない。気づいたら
終わっていた、というのが実感である。
その展覧会の中で、私が特に見たか
ったのは一式造りである。

一式造り(一式飾り)とは、陶器一式、
金物一式のように同じ材質のもの、ある
いは台所道具一式や酒道具一式のよ
うに同じ場面で使用されているもの
を組み合わせて、全く別の物を作るこ
と(作り上げた物)をいう。野菜だけで
大黒様を作る、自転車部品一式で海
老を作る、といったもので、「見世物大
博覧会」では、平田一式飾保存会(鳥
根県出雲市平田町)による陶器一式
の「桃太郎と雉」と、法勝寺自治会

(鳥根県南部町法勝寺)による竹
製品一式の「大国主命と因幡の白兔」
が展示された。それ以外に、江戸から
近現代の一式造りに関する作品・史
料もかなり展示されたが、平田町の人
や一式造り愛好者は、それらが見世
物という括りで展示されたのに違和感
を抱いたという。

私も一式造り愛好者の一人である。
一式造りは、見立の趣向、意表を突く
造形の洗練を通して、近世から現代
の日本文化の一隅を占めるものと確
信している。優れた一式造りは、何よ
り面白く、ほっこりとした懐かしい気
分を醸し出してくれる。だから、何と
かして本格的な一式造りの展覧会をし
たいと思っている。その思いを強くし
たのは今年の年頭で、具体化に向け
て動き出したのはこの春からである。
一式造りは、現在、西日本を中心に数
十の祭礼(あるいはそれに準じた年中
行事)の中に息づいている。

そういうわけで、今年の夏は、一式
造りを見るために、五つの祭に出かけ
た。ここでは、その一つ、平田一式飾
について記してみたい。

平田一式飾りは、鳥根県出雲市平
田町で、毎年7月20～22日に平田天
満宮の夏祭りに合わせて奉納される
もので、一式造り愛好者?にとっては、
鳥根県の法勝寺一式飾りとともに、聖

地と崇められる存在である。

私が訪問したのは7月20日の午後。
伊丹から飛行機で松江空港に着き、
そこからタクシーで平田に向かった。タ
クシーを使わないと、一旦松江に出て
から一畑電車で雲州平田駅を目指さ
なければならず、かなりの時間を要する。
その日の夕方、平田コミュニティーセ
ンターでは、平田一式飾り競技大会の
表彰式が行われるのである。式に先
立ち、鳥根大学准教授高橋健司さん
による一式飾りのミニ講演があった。
高橋さんは、2011年から各地の一式
飾りを探訪し、研究を続けているとい
うので、一式造り愛好者としては横綱
格の人である。

式が終わって6時頃から、いよいよ
展示を巡る。展示場所は、平田天満
宮と雲州平田駅の間の商店街に散
在している。今年の展示は10か所、
それに加えて平田小学校4年生によ
るミニ一式飾りと、常設展示がある。2
0日の夕刻と翌日の午後に分けて、10
か所全部とミニ飾り、そして常設展示
の過半を見て回ったが、それが精い
っぱい。日中はとにかく暑く、常設展示
を全て見るのは断念した。特選とな
ったのは西町による「平昌の激走」(図1)
であった。なかなかリアルでバランス
も良く、陶器一式ならではの質感も出
ているが、個人的にはあまりすぎてい
物足りない。勝手な好みを言えば、見

立による意外性、つまり驚きがないの
である。賞は逸したが、個人的には栄
町の「大自然の驚異「クロコダイル」」
(図2)に惹かれた。単純な作品であ
るが、陶器の質感によって禍々しさが
強調されている。小学生のミニ一式
飾り「鼓笛隊」(図3)もかわいかった。
常設展示では、ひらたメイプルホテル
に飾られていた「出雲阿国」(図4)に
好感を持った。もともとそれは、近世
美術の研究者ならだれでも知っている図
像を、陶器で再現していることへの親
近感であるかもしれない。

21日の14時過ぎ、一畑電車で、湖
遊館新駅に向かった。鳥根県立宍道
湖自然館ゴビウスの特別展に、伝説
の平田一式飾りとして名高い、自転車
部品一式で作られた「海老」が展示
されていると聞いたからである。湖遊
館新駅からゴビウスまで10分ほど歩く。
とにかく暑い。歩いている人などいない。
「海老」(図5)は展示室の片隅にひ
っそりと置かれていた。じつりと眺め、写
真を撮る。しかし、そんな人は私以外
に誰もいない。子どもも親も、生きて
いる湖の生き物に夢中なのである。10
分ほど「海老」の周りを徘徊したが、
関心を持ってくれる人はいないので、
すぐそこその場を後にした。

松江空港に向かうタクシーの中で、
「一式造り展」実現への陰しさを思い、
鬱々たる気分になった。



図1



図2



図3



図4

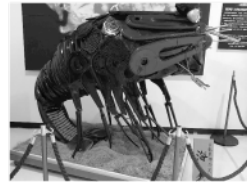


図5

季刊 美のたより No.204

平成30年 10月 1日

発行 大和文華館